

Highland Games

- p.1 ロビンソン家では休みを利用してスコットランドに行きました。
- p.2 「山がどこまでも続いているみたいだね」チップが言いました。
「ここはスコットランドの中でもほんとにきれいなところだ」
- p.3 キッパーは山の絵を描きました。ピフは写真を撮りました。
- p.4 「あの大きな看板をみて」ピフが言いました。「『ハイランド・ゲーム』って書いてあるわ」
- p.5 「ちょっと行って見てみよう」お父さんが言いました。「おもしろそうだな」
- p.6 管楽器の楽団が演奏していました。
「あの人たちが吹いているのはバグパイプだね」チップが言いました。
- p.7 「ステキな響き」ピフが言いました。「それにキルトをはいてる」
- p.8 「この人たちはハンマーを投げるんだ」お父さんが言いました。「ちょっと見てみよう」
- p.9 「わあ」ピフが言いました。「すごい！ねえ、お父さんには無理だよ」
- p.10 「あの人は丸太ん棒を投げるぞ」お父さんが言いました。「どうやって投げるのかな」
- p.11 「ひゃあ！」キッパーが言いました。
「すごいや！ねえ、お父さんにはできないよね」
- p.12 巨大な丸太を持ち上げた人もいました。
それは一番大きな丸太でした。この人は優勝しました。
- p.13 「あの人、ものすごく力持ちなんだろうな」チップが言いました。
「お父さんにはできないよね」
- p.14 係の女の人が話しかけてきました。「子ども向けの競技もあるんですよ」
- p.15 子どもたちは大喜びで、「行ってもいい？」と聞きました。
- p.16 ピフとチップは、参加した競技で1位をとりました。
キッパーはまた別の競技で2位をとりました。
- p.17 お母さんは3位に入りました。「お父さんの番だよ」みんなが言いました。
- p.18 「見てろよ」お父さんが言いました。「あのハンマーを投げてやるぞ」
- p.19 「ちょっとしたお遊びですから」と係の人が言いました。
「このキルトをはいてやってもらいます」
- p.20 お父さんはハンマーを持ち上げました。そしてぐるっとまわって...
- p.21 ぐるぐるぐるぐるまわって...そして手を放しました。
- p.22 あ、大変！お父さんが投げ出されて、わらの中に落ちこちてしまいました。
- p.23 「あなたは入賞されましたよ」係の人が言いました。
「ただし、ハンマーを投げた賞ではなくて...」
- p.24 「ハンマーに投げられたはじめての人に贈られる賞です」

The Orchid Thief

- p.1 ビフ、チップ、ウィルフ、ウィルマの4人はホリーブルー湿地自然保護区に行きました。
- p.2 自然保護官のサリーが子どもたちを迎えてくれました。
「チョウの数を数えてみるのはどう？」サリーは言いました。
- p.3 ウィルマはランの花を見たいと思っていました。
「それはあとで見せてあげるわ」サリーが言いました。
- p.4 みんなはチョウの数を数えました。
リストに書いてあるチョウを見つけるたびに印をつけました。
- p.5 「青いのは5匹も見つけたよ」チップが言いました。「あと、こういうのは3匹も」
- p.6 「チョウチョはもう山ほど数えたわ」ウィルマが言いました。「もうランの花を見てもいい？」
- p.7 サリーは子どもたちをランの花のところに連れて行きました。
「花が掘り起こされている！」サリーは息をのみました。
- p.8 サリーはあわてました。そしてランが盗まれたことを報告しに走って行きました。
「いったい誰がこんなことを？」ビフが言いました。
- p.9 「あの人、何をしてるんだろう？」チップが言いました。「何か掘り起こしてるんじゃないの？」
- p.10 「あの人自転車に乗って行くよ。急いで！つかまえなきゃ」チップが言いました。
「私、サリーに言ってくるわ」ビフが言いました。
- p.11 子どもたちは男の人のあとを追いかけてきました。「逃がすなよ！」ウィルフが叫びました。
- p.12 みんな必死で追いかけてきました。
- p.13 「とまれ！」チップが叫びました。でもその人は止まりません。そのまま走り続けました。
- p.14 サリーがビフと一緒に駆け寄って来ました。「止まれ！」ウィルフが大声を出しました。
- p.15 男の人が止まりました。「いったいどうしたんだい？」その人が聞きました。
- p.16 「この人はアレックスよ」サリーが言いました。「アレックスは植物学者なの。ここの職員よ」
- p.17 「ごめんなさい、アレックスさん」チップが言いました。
「ぼくたち、あなたがランの花泥棒だと思ったんです」
- p.18 アレックスはニッコリと笑いました。「気にしないでいいよ。君たちはただ役に立とうとしただけだ」
- p.19 「あの女の人は何をしてるんだろう？」チップが言いました。
「もういい加減にしるよ！」ウィルフが言いました。「花を見ているだけだよ」
- p.20 「あそこにもランの花があるの」サリーが言いました。「確認した方がいいわね」
- p.21 「ひどいわ！」サリーが言いました。「またランの花がやられてる」
- p.22 「きっとあの女の人が盗んだのよ」サリーは息を切らして言いました。
「あの人を捕まえるのよ！」みんなは走ってその人のあとを追いました。
- p.23 アレックスが女の人のバッグをとりました。中にはランが入っていました！
- p.24 「みんなすばらしかったわ！」サリーが言いました。「ランは取り戻せたわ。みんなのおかげよ」
「あとはランを見なくちゃね！」ウィルマが言いました。

Rats!

- p.1 ビフとチップとキッパーはマジックキーを持っていました。
そのカギが光ると魔法がかかって、子どもたちをおもしろい冒険の旅に連れて行ってくれるのです。
- p.2 そのカギがいつ光るのか、どうして光るのか子どもたちにはわかりませんでした。
ただピカッと光るだけなのです！
- p.3 カギが光ると、子どもたちは必ずビフの部屋にある小さな家に吸い込まれていきます。
- p.4 チップが新しい笛の曲を習ってきました。「ビフ、これきいてよ」チップが言いました。
- p.5 ビフはなんだか悲しそうでした。「どうかしたの？」チップがたずねました。
- p.6 ビフはあるお話を読んでいました。「すごく悲しいお話なの」ビフが言いました。
「ネズミのお話なんだけど...」
- p.7 「ネズミだって！」チップが言いました。「なんでそれが悲しいのさ」
そのときです。突然マジックキーが光りました。冒険の時間がやって来たのです。
- p.8 魔法の力でやってきたのは、川のそばにある町でした。遠くには山が連なっています。
- p.9 「きれいな町だねえ」キッパーは息をのみました。「でもネズミがいるよ。すごい数だね！」
- p.10 1匹のネズミがチップの足元を通り過ぎました。チップはおもわず飛びのきました。
- p.11 「演奏が聞こえる」ビフが言いました。「見て。町の人たちが通りに出てきてる」
- p.12 町の人たちは町長さんに会いに来ました。
そして口々に叫びました。「いったいどうやって町からネズミを追い出したらいいんだ？」
- p.13 すると、変わった服装をした男の人が大きな声をあげました。
「私なら追い出せるぞ。ただしお金はたくさんもらうがな」
- p.14 「払いましょう」町長さんが言いました。
「でも、まずはネズミを追い出してからです」
- p.15 男の人は通りの方へ出てきました。そしてある曲を笛で演奏し始めました。
するとすぐにあのネズミたちが男の人のあとからついてきました。
- p.16 「ネズミがみんなついて行くよ」キッパーが言いました。「あれはきっと魔法の曲なんだ」
「ぼくもあんな風に吹いてみたいなあ」チップが言いました。
- p.17 笛吹きは町長さんのところへ戻って来ました。
「ネズミを追い出しました。さあ、お金を払ってください」
- p.18 「払う必要はありません。」町長さんは言いました。「ネズミはもういません」
「あの町長さん、あとで後悔するわよ」ビフが言いました。
- p.19 「みてるよ」笛吹きは言いました。そしてある曲を笛で吹き始めました。
- p.20 その曲は魔法の曲でした。町中の子どもたちが笛吹きのあとについていきました。
- p.21 チップもキッパーもついて行きかけました。
- p.22 ビフが2人を引きとめました。「待って！」ビフが叫びました。「行っちゃダメ」
- p.23 ビフはマジックキーを見てみました。「ああ、よかった！光ってる」ビフは言いました。
- p.24 「このお話、最後はどうなるの？」キッパーが聞きました。
「自分で読んだ方がいいわ」ビフが言いました。

A Pet Called Cucumber

- p.1 マックスおじさんから手紙が来ました。写真が何枚が入っていました。
- p.2 お母さんが手紙を読みあげました。
「私はまた探検の旅に出る。どうか私のかわいいペットを預かってもらいたい」
- p.3 「いったいなんの動物なんだ？」お父さんが言いました。お母さんは続けました。
「ペットの名前はキューカンバー（「きゅうり」の意）。エサやりは難しくありません」
- p.4 「私は子猫だと思ふな」ピフが言いました。「ぼくはネズミだと思ふ」チップが言いました。
- p.5 「ちがうよ。子犬だよ」とキッパー。「きっとゴリラだぞ」お父さんが頭を抱えました。
- p.6 ちょうどそのとき、マックスおじさんが到着しました。おじさんはジープいっぱい荷物積んでやってきました。「手紙はついたかな？」おじさんは大声で言いました。
- p.7 おじさんはお父さんに水槽を、お母さんには箱を運ばせました。
「私はかわいいペットを運ぶよ」おじさんは言いました。
- p.8 「さあ、この子だよ」おじさんはそう言って、袋をそうと下におろしました。
- p.9 「これがキューカンバーだ」おじさんは言いました。「ヘビだ！」お父さんは言いました。
「ほらやっぱり！」「ゴリラではなかったけどね」ピフが言いました。
- p.10 「キューカンバーの好きな物はコオロギ、ハエ、ミミズなんかだ」おじさんは言いました。
「逃がしたらダメだぞ。そうそう、水槽の中に霧吹きで水をまいてくれ」
- p.11 「じゃあな」おじさんは大声で言いました。「2-3週間で帰るよ」
「なんてこった！」お父さんは頭をかかえました。
- p.12 みんなキューカンバーを見つめていました。
「これからどうしたらいいのかしら？」お母さんが言いました。
- p.13 アニーナが遊びに来ていました。「わあ、きれいなヘビ」アニーナは言いました。
「うちではガーターヘビを飼ってるのよ」
- p.14 「この子は全然こわくないのよ」アニーナは言いました。
「でも最初はある程度触らない方がいいわ。まずはここに慣らしてあげるの」
- p.15 「ちょっとヘビは苦手だわ」お母さんが言いました。
「そんな」アニーナが言いました。「良いペットなのに」
- p.16 それから毎日アニーナが来て、キューカンバーの世話を手伝ってくれました。
アニーナはエサのあげ方から...
- p.17 ヘビのつかみ方、そして水槽のそうじのしかたまで教えてくれました。
- p.18 ついにお母さんがキューカンバーを持ちました。お母さんはヘビが好きになってきました。
「もうこわくないわ」お母さんは言いました。
- p.19 ピフとお父さんはまだ少し苦手でした。
「ヘビは好きだけど」お父さんは言いました。「この家の中ではいやだな！」
- p.20 メイ先生が2匹のヘビを学校にもってくるように言いました。
- p.21 アニーナがクラスで発表しました。「ヘビは驚くべき生き物なのです」
- p.22 マックスおじさんからメッセージが届きました。
「1年ほど戻れなくなった。キューカンバーをもらってくれないかね」おじさんは言いました。
- p.23 「それはちょっとどうかなあ」ピフが言いました。「でもいい考えがあるわ！」
- p.24 キューカンバーをアニーナにあげることにしたのです。
アニーナは「お返しにほんもののきゅうりをあげるわ」と言いました。

Bush Fire!

- p.1 ビフとアニーナとナディムは映画を見ていました。それはオーストラリアの森林火災のお話でした。
- p.2 「火事になったら、動物たちはどうなるのかな？」ナディムが聞きました。
「さあ、わからない」ビフが言いました。
- p.3 そのときマジックキーが光りました。冒険の始まりです。
- p.4 みんなは海岸にやってきました。「大変！あっちの方を見て。けむりだらけよ」ビフが言いました。
- p.5 1人の男の子が海から駆け出してきました。
「おばあちゃん！」男の子が叫びました。「森が火事だよ！うちに帰らないと」
- p.6 「急ぎましょう、ベン！」おばあちゃんも叫びました。「急いで帰らなくちゃ！消防隊をよびましょう」
「何か手伝うこと、ありますか？」アニーナが言いました。
- p.7 ベンは家に戻らなければならないと言いました。「うちの屋根や壁に水をまくのを手伝ってくれるかい」
- p.8 「森が火事になるとコアラが大変なんだ」ベンが息を切らしていいました。
「鳥は飛んでいけるけど、コアラはそうはいかないからね」
- p.9 「もうすぐヘリコプターが来て、水をまいてくれるわ」おばあちゃんが言いました。
「でも時間がないの！急いで！ホースをのぼして」
- p.10 ビフとアニーナはホースを見つけました。ナディムが水道をひねりました。
みんなは壁に向かって水をかけました。
- p.11 「ベン、ウィルソンさんのおばあちゃんの所へ行って、こちらに来るように言って」おばあちゃんが言いました。「みんなで逃げる準備をしなくちゃならないから」
- p.12 ベンとナディムはウィルソンさんの家のドアをたたきながら大声で呼びました。でも、ウィルソンさんは出てきません。
- p.13 2人は急いで家の裏側にまわってみました。中に駆け込みましたが、ウィルソンさんは見つかりません。
- p.14 ちょうどそのとき、ウィルソンさんがやってきました。
「バニャップを探していたのよ」ウィルソンさんは言いました。
- p.15 「ヘリコプターはどこ？」ビフが言いました。「音が聞こえるわ！」アニーナが言いました。
- p.16 ちょうどそのとき、ヘリコプターが飛んできて、そのあたりの森に向かって放水し始めました。
- p.17 「これでどうなるの？」ナディムが聞きました。
「森の木がびっしょりぬれれば、火はこっちまで広がらないんだ」ベンが言いました。
- p.18 別のヘリコプターもやって来ました。
ベンたちの家の裏の森にも放水を始めました。
- p.19 パイロットが子どもたちに手をふっています。「ヘリコプターはもっと水を持って来るわ」おばあちゃんが言いました。「だけど、わたしたちはすぐに逃げましょう」
- p.20 「子どもを抱えたコアラだ」アニーナが言いました。
「体が熱いんでしょう」おばあちゃんが言いました。「のども乾いているかもしれないわ」
- p.21 「水、飲むかな？」ビフが言いました。「やってみましょう」おばあちゃんが言いました。
おばあちゃんはバニャップのボウルに水をいれました。
- p.22 「今のところ、ヘリコプターの水のおかげで火はおさまっているわ。でも私たちは逃げなきゃならないの」おばあちゃんが言いました。「いろいろ手伝ってくれてありがとう」
- p.23 「役に立ててよかったです」ビフが言いました。「コアラも見られたし！」ナディムが言いました。
そのとき、マジックキーが光りました。
- p.24 「ものすごくこわい冒険だったね！」ビフが言いました。
「それでもとにかく私たちコアラを助けたのよ」アニーナが言いました。

Bessie's Flying Circus

- p.1 ビフ、チップ、ウィルフ、ウィルマの4人は航空博物館に行きました。
- p.2 翼が2枚ある飛行機がありました。「複葉機^{ふくようき}っていうんだよ」ウィルフが言いました。
「空を飛んでいる時はきっと寒いでしょうね」ビフが言いました。
- p.3 「いつか飛行機を操縦したいな」ウィルマが言いました。
- p.4 子どもたちはビフの部屋にいました。
世界で初めて行われた航空ショーについての記事を読んでいたのです。
- p.5 突然、マジックキーが光り出しました。子どもたちの冒険が始まりました。
- p.6 子どもたちは航空ショーの会場にいました。
それは『ベッシーのフライング・サーカス』というショーでした。6機の飛行機が同時に飛んでいます。
- p.7 「あんなこと、やってみたいなあ」ウィルマが言いました。
「ぼくも！」チップもウィルフも言いました。「きっと寒いでしょうね」ビフが言いました。
- p.8 ベッシーは1番先頭の飛行機のパイロットでした。翼の上に立っている人たちもいます。
- p.9 「あの人たちを見てよ。翼の上で曲芸をしてるよ」ウィルフが言いました。「勇気があるんだなあ！」「わたしもやりたいなあ」ウィルマが言いました。
- p.10 最初のショーが終わったあと、子どもたちはベッシーを見かけました。
「話しかけてみようよ」ウィルマが言いました。
- p.11 ウィルマはベッシーに、飛行機の操縦を習いたいと思っていること、ベッシーみたいになりたいということ話をしました。「きっとできるわよ！」ベッシーが言いました。
- p.12 1人の女の人が重そうなバッグを持って通り過ぎました。ウィルフが手伝いましょうかと聞きましたが、その人は「いいのよ！あっちへ行行って！」と乱暴に言いました。
- p.13 「あの人、なんであんなに怒ったんだろう？」ウィルフが言いました。
「きっと何か企んでいるんだ！」ウィルフはそっとあとをつけました。
- p.14 その女の方はバッグから容器を1つ取り出しました。そして、それをベッシーの飛行機のそばに置いてあった容器と取り替えました。
- p.15 ウィルフは急いでベッシーに言いに行きました。
「女の方がガソリンの容器を取り替えちゃったよ」ウィルフは言いました。「どうしてなの？」
- p.16 「取り替えたのは水の入った容器だわ、きっと」ベッシーは息をのみました。「タンクに水を入れたら飛行機は飛ばないわ」
- p.17 みんなは飛行機のところに急いで戻りましたが、もう遅すぎました。ベッシーの係の人が水を入れてしまっていました。「そうだ、いい考えがある！」ベッシーが言いました。
- p.18 「これは新しいタイプの飛行機よ。ベッシーが言いました「まだだれも見たことがないの」ベッシーは子どもたちに乗るように言いました。
- p.19 「あなたたちは最初のお客さんよ」まわりにいた人たちは目を見張りました。
- p.20 ベッシーの新しい飛行機が飛びたちました。飛行機の後ろから大きな横断幕がはためいています。そこには「ベッシー旅客サービス」と書いてありました。
- p.21 子どもたちは観客に手をふりました。「最高ね」ビフが言いました。「寒くないしね」
- p.22 「あの女の方はどうしてベッシーの飛行機を飛ばせなくなかったの？」ウィルフが聞きました。
「私のことが好きじゃないのよ」ベッシーが言いました。
- p.23 「だけど、そうはさせないわ。彼女には負けられないわよ」そのときマジックキーが光り出しました。
- p.24 「私きっといつか飛行機を操縦する！」ウィルマが言いました。
「ぼくたちがお客さんになるよ」チップが言いました。